

狐のつかい

新美南吉

青空文庫

山のなかに、猿さるや鹿しかや狼おおかみや狐きつねなどがいつしよにすんでおりました。

みんなはひとつのあんどんをもっていました。紙ではった四角な小さいあんどんであり
ました。

夜がくると、みんなはこのあんどんに灯ひをともしたのでありました。

あるひの夕方、みんなはあんどんの油あぶらがもうなくなっていることに気がつきました。

そこでだれかが、村の油屋あぶらやまで油を買いにゆかねばなりません。さてだれがいったもの
でしょう。

みんなは村にゆくことがすきではありませんでした。村にはみんなのきれいな獵師りようしと
犬がいたからであります。

「それではわたしがいきましよう」

とそのときいったものがありました。狐きつねです。狐きつねは人間の子どもにばけることができたか
らでありました。

そこで、狐きつねのつかいときまりました。やれやれとんだことになりました。

さて狐きつねは、うまく人間の子どもにばけて、しりきれぞうりを、ひたひたとひきずりなが

ら、村へゆきました。そして、しゅびよく油あぶらを一合べっごうかいました。

かえりに狐きつねが、月夜のなたねばたけのなかを歩いていきますと、たいへんよいにおいがします。気がついてみれば、それは買ってきた油のにおいでありました。

「すこしぐらいは、よいだろう。」

といって、狐きつねはぺろりと油をなめました。これはまたなんというおいしいものでしょう。

狐きつねはしばらくすると、またがまんができなくなりました。

「すこしぐらいはよいだろう。わたしの舌したは大きくない。」

といって、またぺろりとなめました。

しばらくしてまたぺろり。

狐きつねの舌したは小さいので、ぺろりとなめてもわずかなことです。しかし、ぺろりぺろりがなれどもかさなれば、一合べっごうの油もなくなってしまう。

こうして、山につくまでに、狐きつねは油をすっかりなめてしまい、もってかえたのは、からのとくりだけでした。

待っていた鹿しかや猿さるや狼おおかみは、からのとくりをみてためいきをつきました。これでは、こんやはあるがとまりません。みんなは、がっかりして思いました、

「さてさて。狐^{きつね}をつかいにやるのじゃなかった。」
と。

青空文庫情報

底本：「いんぎつね 新美南吉童話作品集」てのり文庫、大日本図書

1988（昭和63）年7月8日第1刷発行

底本の親本：「校定 新美南吉全集」大日本図書

入力：めいこ

校正：もりみつじゅんじ

2002年12月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

狐のつかい

新美南吉

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>